

京都部落問題 研究資料センター通信

第20号

発行日 2010年7月25日 (年4回発行) 編集・発行 京都部落問題研究資料センター

報告 2010年度部落史出張講座

地元で学ぶ地元の歴史 in 崇仁

五月二十八日、六月一日、二五日、七月九日の四回にわたって、

当資料センター主催の「部落史出張講座 地元で学ぶ地元の歴史」を崇仁コミュニティセンターで開

催しました。この講座は、地域の歴史を地元の方々とともに学習することを目的として企画したもので、「NPO法人崇仁まちづくりの会」のご協力をいただいて、地元の方々、小・中学校の先生方など多くの参加がありました。講演の要旨は次の通りです。

* * *



第1回

川の流れに人の身は

近世 六条村の歴史

講師 辻ミチ子さん

(元京都文化短期大学教授)

江戸時代の初め、松原通東洞院東入に住んで斃牛馬の処理や皮を扱う仕事を生業とし、また公役として刑吏の仕事もしていた六条郷の人びとが、六条河原に家を建てるようになる。これが六条村の始まりである。鴨川の洪水で何度も大きな被害を受けながらも、家を建て直し、阿弥陀如来を拝む道場を建てて生活を続けていた。宝永元年(一七〇四)の史料によると、

年寄嘉兵衛・与三兵衛のもとで公役に携わる家が三九軒、借家で様々な仕事をした家が二九軒、合わせて七二八人が住んでいたということである。

一八世紀の初めに六条村は現在の地域に移転を命ぜられる。しかし、村の指導者たちは幕府の言いなりにするのはなく、河原での斃牛馬処理の作業場のこと、引越

費用のこと、川の氾濫で家が流れないようにする置き土のことなどで条件をつけ、何年もかかって交渉をおこなった。そして、正徳四年(一七一四)に現在の柳原の地に移転をする。その後、幕末にかけて銭座跡村、大西組という地域を開発し、明治に入ってから水車と呼ばれる地域も含んで現在の崇仁地区になっていく。

以上、鴨川の流れと切り離すことの出来ない六条村の人びとの生活を、「諸式留帳」や「余部文書」、「柳原町史」などの史料を使いながらわかりやすく説明された。

第2回

柳原銀行とその時代

講師 重光豊さん

(元柳原銀行記念資料館企画運営委員)

被差別部落の中に銀行が存在したという事は、「部落=貧困」という一面的な見方を変え、部落の多様性を考える上で重要な出来事であった。銀行があったということは、そこに商業活動、産業活動があるということ、経済力がないと成り立たないものである。

柳原銀行は、日清・日露戦争の中で全国的に好景気が続き、崇仁

地区の産業である皮革・履物の需要が大きくなっていくなかで、一八九九年に設立された。銀行設立のリーダーで、頭取を務めた明石民蔵は、企業経営者としても有能だったが、部落改善運動の論客でもあった。部落自主改善運動の機関誌『明治の光』で多くの論稿を展開している。「世の進運に遅れず、外は旧来の陋習」を破り、部落の解放を成し遂げようという強い思いを持っていた。銀行を中核として経済振興をはかり、世間に伍していくことで差別意識を打ち破っていきつとしたのである。

明治後期以降、不況、米騒動などをきっかけとして町内の富裕層が流出し、町内経済が崩壊していく中で柳原銀行は経営が厳しくなり、一九二〇年には山城銀行に改組して本店も市内に移す。この時点で、柳原町にあった銀行の存在意義は失われてしまう。そして一九二七年に倒産に至る。

以上、銀行の設立から倒産までの経緯を、当時の新聞記事や「京都商工人名録」、「大蔵省銀行局年報」など数多くの資料や統計を使って詳しく説明された。最後に、明治時代、明石らが走り回って町政を近代化し、商工業を盛んにす

ることによって差別に打ち勝とうとした心意気を捉えなおすことの必要性を強く訴えられた。

第3回

柳原銀行社屋保存運動から

まちづくり運動

歴史とまちづくりの交差

講師 山内 政夫さん

(NPO法人崇仁まちづくりの会)

柳原銀行保存の運動は、一九八九年の「柳原銀行保存のためのシンポジウム」の開催から本格的に取り組まれるようになり、その後、登録文化財指定、解体、移築そして、一九九七年に「柳原銀行記念資料館」開館となった。

この保存運動は、単なる過去の建物の保存ではなく、地区改良事業の停滞、人口の減少などといった地区の厳しい状況の中で、地域の人々が立場を越えて町を再生していく、町づくりの一環として取り組まれた。具体的には、自治連合会、部落解放同盟支部、全解連支部の三者が「文化遺産を守る会」や「まちづくり推進委員会」に集まり議論をつづけることで、保存運動と町づくり運動を重ねていったのである。

これまでの行政に依存してきた町づくりを振り返って見るとき、百年前に町長であり、銀行の頭取でもあった明石民蔵が様々な人脈を駆使して町の自立について考え、自力で差別に立ち向かおうとしていった思想性、その姿勢こそ、現在の我々に欠けているものであり、学んでいかねばならない。また、そのためにも、明石民蔵について更に研究を進めていく必要がある、と締めくくられた。

第4回

菱野貞次と京都市政

菱野は京都市に何を訴えたか

講師 白木 正俊さん

(京都市上下水道局琵琶湖疎水記念館研究員)

戦前、被差別部落出身の市会議員は二人しかいなかった。その一人である菱野貞次は、崇仁地区の部落解放運動の功労者であるが、明石民蔵、桜田儀兵衛、朝田善之助などにくらべ認知度は低い。しかし、当時の市会議事録をみると多くの発言がなされており、市会議員として果たした役割がこれまでの部落史には反映されていないのが現状である。これが菱野の市会での発言、役割を研究する契機となった。

菱野は一九二九年五月の市会議員選挙で無産政党的労働大衆党から立候補し初当選する。それから4年間、非常に多くの政策要求を市議会でするがその大多数が低所得者層・労働者の問題であった。「市バス値下げ要求」や「借家への上水道給水不備の解消要求」「市電・市バス従業員待遇改善要求」など数多くの政策要求をおこなっている。

水平運動家でもあった菱野が部落問題について言及したのは、一九二九年七月の「京都市土木局『京都市計画小誌』別添地図の差別表記について」という案件、一回だけであった。それは部落の問題を軽視していたということではなく、貧困の問題は部落に限った事ではない事を強く認識したものであった。

菱野の市議会での出席状況、発言、政策要求などを、当時の新聞、「市議会会議録」から丹念に調べ上げられ、わかりやすく説明された。菱野は晩年には崇仁学区の学務委員まで勤め上げる。しかし、菱野のこれらの活躍についてはまだ不明な点も多く、更に解き明かして再評価していきたい、と締めくくられた。

本の紹介

竹沢尚一郎著

『社会とは何か システムからプロセスへ』

田中和男

(龍谷大学非常勤講師)

今は亡き落語家・桂枝雀さんが落語の枕で、南半球のオーストラリアへの飛行機の旅で赤道の赤い線を見た時は本当に感激したという話をして聴き手のくすぐりを取っていた。勿論、赤道の赤い線が存在するわけではない。最近、宇宙での任務を果たした女性宇宙飛行士は宇宙から見た日本の美しさを語っている。彼女が見たのは本州などの島影なのか、それとも、日本海や太平洋に引かれた赤い国境線に縁どられた日本の姿だったのか。ここでも、国境線が現実の海や陸地に引かれているわけではない。地図に示された領土や領海を示す約束事に過ぎない。にもかかわらず、国境線で区画された日本、中国などの国家の枠組みは、グローバル化の進んだ現在でも、というよりグローバル化のゆえにというべきか、私たちの生活を捉えていてそこから離れることは容易でない。

い。図面に書かれた微や境界線は頭の中で分けたり印象づけたりする手段に過ぎないのに、実際の社会の中では排除や差別となってしまう。ある人は「暗黙の共同謀議」という(内田隆三『生きられる社会』)。想像された虚構の力をあなどることはできない。そこに社会の不思議があるのかも知れない。

本書『社会とは何か』は、題名通り、こうした社会がなぜ存在するのかを、その歴史に遡って考えるヒントを与えてくれる。社会というまとまりが、まとまりながらも排除の仕組みを含んでいる、というよりまとまるために排除の契機を含まざるを得ないものとして成立したことが、政治、経済の領域からだけではなく、古い仕組みを破って新たな政治、経済を構築しようとする知の領域での議論と重ね合わせて考察されている。

本書がいう社会は、人間が生きるための身近な社交という意味の社会ではなく、「国家と広がりをおなじくする枠組みとしての社会」である。「むすび」で確認されているようにフランス語においても「社会」の語は一二世紀に登場した際には「仲間」や「結社」を意味したという。したがって、身近な社会ではなく国家と同じ広がりを持つ社会概念が一義的に使われるようになったのはそれほど歴史を持たない。それがどのように語られ私たちの行動を規制するようになったか、このためにも近代西欧の社会科学や社会学という知の発達をたどる必要がある。

本書の筆者・竹沢尚一郎さんは現在国立民族学博物館教授をされており、社会人類学と宗教学をベースに多くの著作を発表されている。その中に、本書とも重なる、人類学の思考や社会科学の発展を、西欧の他者認識と社会の変化を通して考察する『表象の植民地帝国』(二〇〇一年刊)や『人類学的思考の歴史』(二〇〇七年刊)などが含まれている。フランス民族学の基盤となったデュルケムなどの社会学についての浩瀚な知識、あるいはフランス社会での生活経験が、本書でも生かされているといえよう。

本書は西欧において社会の概念が形成され定着する過程を追った前半の三章と、社会問題に対する社会的包摂の実例(フランス・日本)を紹介する後半の二章に分かれている。

「第1章・社会の発明」では、一七世紀の西欧先進地域において国家と同じ広さをもつ「社会」がどのように発明されたかが述べられる。王権神授で正当化を図る君主制に対して自然権の平等を虚構して、社会契約による国家を構想したホッブス、スピノザ、ルソーなどが取り上げられる。自己保存の欲求と権利を持ち「戦争状態」である自然状態を克服するために絶対者に生存権を委譲するとして国家の発生を弁証したホッブス、支配と権力は認めるものの「全社会はできる限り共同で支配権を握ることを求める背教のユダヤ人であるスピノザ、文明の墮落を克服して自然の「透明さ」を社会契約により復活させようとしたルソー。彼らを通して国家形成の基盤として、勤労・生産し所有を保障される共同性「社会が要請された」。

「第2章・社会の発見」では、一八世紀の英仏など、富国化を競う中で、自然科学・経済学の発展がみられるとともに、国家主導の都市改造、治安の安定などが計ら

れた。国家は犯罪者を処罰する「死の権力」としてだけでなく、生を管理・規律する必要がある。警察だけでは不十分な福祉を含むポリスが重視された。その一方で人口の都市集中・不衛生などの社会問題と社会を新たに分断する階級・階層問題が深刻化する。こうした諸問題を解決する方法について論じられる自由な言論の空間である「公共圏」が成立し、「社会」が共有されていくことになる。

「第3章・社会の科学的成立」。ここでは、筆者・竹沢さんの専門とされるフランスの社会学が一九世紀に形成されることを、同時代の「空想的社会主義」との対比で論述されている。人間の自由な結合であるアソシアションの拡大を目指すサン・シモン、フリーエなどに対してフランス社会学の代表であるデュルケームは、違ったもの同士の社会連帯を理想とした。連帯の思想に導かれてフランスにおいて社会保障制度が制度化されていくが、社会は閉ざされたシステムと考えられ、社会の範囲を国家の範囲に一致させるナショナリズムを随伴させた。

このような社会と国家の範囲を一致させるといふ見方は、国家の枠組みが揺らぎだしグローバル化が進行する中で、社会概念の再定

義が必要とする異論を生じさせている。竹沢さんは、国民と社会の関係に触れて、国民概念は「神秘化作用」が働いてその内部に対立や分裂が存在しないとみなされるのに対して、社会は分裂・対立を認められた上で統合を実現していく方向が含まれていることを改めて想起させている。

後半の二つの章は、前半の社会概念の成立の可否を検証するため、著者が調査・研究したという社会問題の現場が提示される。原理論に対して現状分析といったところだろう。一つはフランスのスターフ論争をめぐる社会の在り方であり、もう一つは、第二次世界大戦後の日本の九州を中心として展開された谷川雁のサークル村のプラクティスである。ここでは、国家と同じ広さの社会の概念に隠れていた「仲間」や身近な「結社」としての社会が質を変えて浮き上がってくることになる。

まずはフランスを扱う「第4章・文化と社会」。グローバル化に伴う外国人移民の流入は新たな社会的統合という課題を明確にした。西欧各国は植民地所有の歴史とEUの域内移動の自由に保証されて様々な文化的背景を持つ移民が定住している。経済が曲がり角を経験した一九七〇年代以降、不況の

際には外国人移民に対する社会的排除を幾度か経験している。英米は多文化主義やマルチカルチュリズムの主張により共存を模索している。フランスの場合、国家と個人の間で中間団体を承認しない共和主義の伝統により、公私を分離し、私的な文化的差異が公領域に侵入することを強く拒否することとで、差異が公然化することを抑えようとした。それが逆にマイノリティであるイスラム系の人々の公立学校でのスカーフ着用を禁止することで、マイノリティのアイデンティティを抑圧することとなった。

最後の「第5章・社会と共同体」は日本での実践が取り扱われる。ここでは社会を国家と範囲を同じくする国家の中のシステムとする考え方を相対化するため「生活の共同と情緒による結びつきとしてのコミュニティ」が改めて提起される。タイでのHIV患者のケアのコミュニティが紹介される。アのコミュニティが紹介される。章の中心は日本でのコミュニティの実践として、水俣病患者を取り巻く地域、漁民の世界と陸地に住む人の生活世界のずれ、チツソ水俣と住民・患者、市・熊本県、政府厚生省、さらに学者などの係わりが描かれる。その中で石牟礼道子の『苦界浄土』が出版され、漁

民の暮らしぶり、発病による苦しみ、地域社会からの排除が描かれた。この事件の記録と記憶の背後に存在したのは、竹沢さんによれば「戦後の九州に花開いた、文芸公共圏」であり、谷川雁のサークル村の活動であった。

社会についての概説書は、社会学の入門書を含めて多く刊行されている。本書の特徴点は「社会」概念の近代での展開を明らかにすることによって、近代の社会概念が隠れてしまった違った社会の可能性を提起していることにある。再発見された社会は、よくあるように「日本的」共同体ではない。個々の差異の共存を図る多様性が前提にされている。社会の概念の発生史を、社会状況の変化に対応する社会認識の歩みとして提示されているのも本書の特徴だと思われる。すでに四〇年前のことに属するが、経済学者・内田義彦さんの『社会認識の歩み』（岩波新書）という名著を思い出させた。内田さんは、個人個人の社会認識の深化と寄り添うように人類の社会認識の歩みがあったとして、ホツプス・スミス・ルソー・マルクスなどの社会科学者の社会理論を紹介していた。竹沢さんの著書が、ホツプス・ルソーから始まってコント・デュルケームにいたる社会学者に

連なっているのは、社会科学の主流が、マルクス主義没落後に経済学から社会学にとって代わられたことを意味している。歴史から思想の分野にいたるまで社会学的思考と方法論の影響を抜きにして、現在の社会科学研究は存在しえないであろう。

疎外や階級対立の問題ではなく、社会的排除や包摂が本書の主題のひとつになっっているのも、年代の変化が現れている。この問題と絡んで差別の問題も考えられる。近代のネーション建設は身分や地域を超えた国民としての同等性と共通性を前提としていた。想像の共同体といわれるように、差異を解消してメインストリームに寄り添うことが様々なマイノリティの社会運動の目標であった。社会福祉の対象とされた貧困者や非行少年の救済や改善を目指す先駆的な取り組みの場合もそうであった。例えば、東京の都心近くの貧民窟に住む貧しい幼児の保育施設として一九〇〇年、野口幽香たちによって開設された二葉幼稚園の設立趣意書は「可憐にして憫然至極」な幼児たちに「未だ悪しき感化の浸潤せざる時代より、良き境遇に置き教育を施し、良き国民と為すこととは、実に吾等同胞の義務といふも不可なかるべし」と述べていた。

一九世紀末から二〇世紀初頭にかけて拡がりだす被差別部落民の差別解消への要請、融和運動・水平運動も、一面においては国民としての同等の自由が求められていた。皮肉なことに、一八七一年の「賤称廃止令」は幕藩時代の地域ごとの様々な呼称と実態で差別を受けた人々を「えた・非人等」とネーションワイドに統括されて把握された。福祉の向上と部落問題の解決は国民的課題とされたのであった。

国民としての一様の統合ではなく、二〇世紀後半以降の現代では様々な個性や集団的アイデンティティを前提にした社会的統合が求められる。「もし社会が均質的なシステムであったとすれば、それはやがてその内部の活力を失い、たんなるのつべらぼうの制度として硬直化していったであろう。社会がその力を枯渇することなく、新しい力を生み出しつづけることができるのは、内部に多様な異質な要素を抱え、そこに生じる軋轢や齟齬が私たちにより良き生とは何かをつねに問い質しているためである」という結論的な表明が、今後の社会を考える前提に置かれることであろう。

最後にいくつかの疑問を記して、本稿の終わりとしたい。

ちよつとしたミスリーディングではないかと思われる箇所。ホッブズの社会契約の説明の中で、国民から権利を譲渡された主権者が、国民に対して「どんなに……理不尽な措置を講じたとしても、拒否する権利をもたない」と竹沢さんは指摘している。勿論「抵抗権」の承認をホッブズに求めることはできないにしても「各人の生存……」の手段として設定された主権が、手段の枠をこえて個人の身体生命をおびやかすならば、それは自然状態への復帰であつて、各人は公然と自然権としての自己保存権を行使することができる（『リヴァイアサン』²、岩波文庫の水田洋一訳者序文）³といふことはできる。

前半と後半のつなぎの問題。原理論ないしはヨーロッパでの近代の展開を現代フランスや日本に適用する場合に何らかの媒介となる説明が必要ではないか。日本と西欧との社会と社会理解の方法の違い、前期近代や後期近代というような段階の違いも想定しうる。勿論、こうした想定自身、日本、フランスなど近代国民国家の枠組みを前提にしているという問題性や、近代を段階づける尺度の恣意性の問題もある。反対に、そういった地域の違いや時代・段階を超えた普遍的な課題の共通性をこそ

竹沢さんは分析の前提としていると考えることもできる。

桂枝雀さんは違う高座の枕の話で、こんなことを言っていた。落語の世界には動作や声色によつて二人（多数）が会話をしているかのようにみえるという虚構・約束があることを話したあと、ある時、嘶しの会話の中で「上にあがりなさい」というセリフを言ったら客席の女性の観客と目があつて、その人が高座に上がってきたことがあつたという。枝雀さんは彼女としばらく高座で世間話をして席に帰ってもらつたと一応のオチを付けるのである。この話が本当にあつたとは考えられない。しかし落語の話し手と聞き手の中にある暗黙の社会的コードの存在と、それを理解しなかつた人間の存在を、コードを理解しないと排除するのではなく、違ったコードに入れ込むことによって、女性に恥をかかせないようにさせようという枝雀さんの繊細な心遣いを感じ取ることができた。

（中央公論新社、二〇一〇年）

現代史が持つ意義と重み

希望の家創立50周年と東九条

山本崇記
(立命館大学研究員)

東九条における希望の家の位置

この文章では、東九条に位置する地域福祉センター希望の家50周年記念誌の作成に携わった際に、私自身が考えたことを、書き綴つてみたいと思う(注1)。私にとつて、東九条といえば、在日朝鮮人、民族差別、日本人の責任というものと直結する地域だった。40番地(「0番地」)、東九条マダン、エルフアなど、学生時代は「点」としての関わりしか持てなかった東九条に、半世紀以上にわたり活動を続けてきた「希望の家」という施設が存在していたことに無自覚



資料A

であつた。様々な運動の拠点となり、地域の結節点となり、さらにキリスト教という信念によって支えられてきたその施設の意味を考へることは、日に日に私のなかで大きな関心事になっていった。

「オール・ロマンズ事件」に関する研究で著名な、元京都部落史研究所員である前川修氏(希望の家所長)から、50年目を迎える希望の家の記念誌を作つて欲しいと頼まれたとき、上記のようなことに関心を持ち始めていた私には、大きなプレッシャーとともに、抑えがたい好奇心も湧いていた。しかし、東九条地域のまちづくりを通して接点を持ち始めることができ、希望の家の職員の方々からの情報以外に、何も予備知識を持っていなかった。

「好きなように書いてもらつていい」という前川所長の言葉を受けて、希望の家に日の目を見ず

に眠っている資料を一点一点確認することが先決だと考えた。さらに、その作業は、職員にみえるかたちで、また、希望の家の空気を感じ取るために、施設内で行うことが必要だと考え、その要望を伝え、作業を始めたのが二〇〇九年三月であつた。現在、確認している文書資料は四三〇点ほどであり、写真資料を加えると一、〇〇〇点を超える。特に、一九六二年から始まる『希望の家新聞』は、施設の様子だけでなく、地域の声や医療・福祉を通じて協力関係にあつた専門家の文章が記されており、休刊を繰り返しながらも、その時々

の東九条を伝えていく。また、『市有財産貸付契約書』(一九六三年)や『第2種社会福祉事業団体希望の家に対する寄附金について』(一九六三年)などから、早くから京都市が希望の家の役割を高く評価していることが窺えた。

主に、高齢者を中心とした地域福祉事業と小中高生を対象にした学童保育・児童館事業に分かれていた希望の家は、日々、地元の高齢者の方から、やんちゃな子どもたち、さらに、シスターや教会からのボランティアの方々など、大

変、人の出入りが活発な施設でもある。そこで、私のような「observer(よそ者)」が何やらこそごとと作業をしている姿を見ても、寛容に、ときには、訝しげに、接して頂いたように思う。歴史と現在が混ざり合う瞬間、瞬間が非常に貴重な体験となつた。

資料の集積点と施設の成り立ち

『地域と共に50年 希望の家創立50周年記念誌』(以下、記念誌)の発行主体は、社会福祉法人カトリック京都司教区カリタス会・地域福祉センター希望の家である(資料A)。そして、「地域と共に」という理念を掲げた福祉施設が希望の家である。その歴史性と現代性にどう応える記述を行つていくのか。幸い、東九条地域でのまちづくりに関わる機会を与えられていたこともあり、「あるべき姿」「あろうとしている姿」を先行して描くことも許されるのではない。そして、現代史というのは、その点まで描くことを含み得ると考えていた。

現代史を描き出すうえで、資料の在り処は、小学校や寺院など、人々の生活と関係を繋ぐ施設であ



写真B

ることが多い。それ以外では、奇
 特な関係者の個人所蔵という場合
 がある。しかし、東九条地域では、
 第二種社会福祉事業団体である希
 望の家に、単なる事業関係資料だ
 けでなく、地域に関わる資料が豊
 富に揃っていた。とはいえ、すぐ
 に得心もいった。それは、希望の
 家の成り立ちに関わる。創設者の
 フランシスコ・ディフリー神父（初
 代所長）が、地域の子どもたちのた
 めに補習学級を始めたことにある
 （写真B）。一九五九年四月、崇仁
 地区南部の屋形町に「希望の家」
 は誕生した。

キリスト者の使命である宣教活
 動を控え、あくまで地域の人たち
 のために奉仕するという地域住民
 との「約束」は、決して信仰と矛
 盾するものではなかったようにみ
 える。また、地域に住みこみ、自
 ら地域改善に率先して汗を流す姿
 が、当時、バタヤ（廃品回収）など単純
 労働者が職業構成のなかでは最も
 多く、六六〇㎡に三〇〇戸、一、
 四〇〇人が簡易バラックに住む密
 集率を抱えるのが屋形町を含めた
 東九条地域の状況であった。さら
 に、生活保護率は市内平均の一四
 倍という数字を示していた（『東九
 条実態調査報告書』一九六九年）。そ
 んな町のなかを、リヤカーをひき
 ながら一軒一軒をまわるディフリー
 神父の司祭服の襟元は、いつも真っ
 黒に汚れていたという。このよう
 な生き方が、キリスト者として標
 準的であるわけではない。地域の
 人たちのなかには、この神父の姿
 に、戸惑い、違和感を覚え、とき
 に反発も感じた者もいる。「戦勝
 国」である米国からやってきたカ
 トリックの神父が、不良住宅化が
 激しくなっていく東九条北東部と
 崇仁南部を行き来する姿が、住民
 にとって「奇異」に映っていたと
 してもおかしくはない。

が動き始めた崇仁地区のなかでも
 「0番地」とさえ称された屋形町
 には、明日にも立ち退きを迫られ
 かねないという不安定な住環境の
 なかで、住民が町内会を結成し、
 まちづくりを開始しようとしてい
 た。このような住民の動きと、ディ
 フリー神父の熱意がかみ合った。
 その地点は、当初は東九条ではな
 く、屋形町（崇仁地区）であった。
 とはいえ、屋形町と東九条の双方
 の住民から協力を得、バラック仕
 立ての小さな教室が出来上がった。
 それから、一年を経て、現在の希
 望の家カトリック保育園（一九六七
 年設立）の土地をディフリー神父の
 私財と教会関係の寄付などにより
 購入し、カマボコ兵舎と鉄筋コン
 クリート二戸建ての新館が東九条
 に開設するのである（写真C）。

キリスト者と住民の相互作用

培われる地域の力

キリスト者による慈善事業とは
 およそ異なる成り立ちをもつ希望
 の家と地域住民の関係性を、私は
 50周年記念誌を作成することを通
 じて、「地域化」と「内部化」の
 力が作用したものであると解釈し
 た。何よりも地域に根付き、地域
 にこだわり、地域に還すことにこ
 だわったディフリー神父とその後
 のマンティカ神父（第二代所長、初
 代保育園園長）の指向性があり、そ
 れは地域社会のなかで多様な主体
 とのぶつかり合いが起こる一九七
 〇年代を経て、一九八〇年代に青
 年キリスト者たちによって深めら
 れていく。この「地域化」を通じ
 て、単なる第三者として住民に奉
 仕するキリスト者であることから、
 宗教の濃淡による緊張関係を含み
 ながらも、地域社会の構成員とし
 て欠かれない存在となり、同時に、
 主体として変化していく過程こそ
 が、「地域化」として見出しうる
 特徴だと考えたのである。一九六



写真C

五年に所長に就任したマンティカ神父は、地域のための施設として、住民主導の運営に切り替え、住民との共同の運営委員会を設置する。さらに、一九八〇年代になると「東九条現場研修」を通じて結成された「HEART」（東九条キリスト者地域活動協議会）を軸に、自ら地域に住み、子どもを育て、地域改善の担い手となっていく若手キリスト者が出てくる。それにより、部外者／非部外者という境界線は、徐々に相対化されていく。

一方、この「地域化」には、住民側からの働きかけも必要となる。「宣教活動を控える」という関係形成を求め、施設の運営に参画し、民生・児童委員、少年補導委員、市政協力委員、体育振興会、消防団分会などを通じて、希望の家の力強い協力者となってきた住民たち。ユニークなのは、下層社会化を強める高度成長期にあつて、カトリックの運動として始まった共助組合運動を、非常に早い段階で試みていることである。「貯蓄信用共助会」としてスタートし、賛同する住民から十円の会費を集め、共同購入と貯蓄を通じて互いの生活を支え合う、まさに「共助」の

仕組作りであつた。この共助組合の取り組みが、毎年恒例事業となつていく秋の大バザーに繋がっており、その第一回目が希望の家共助組合の主催で、一九六六年一月に行われている。この地域力ともいえるようなものが、「地域化」するキリスト者のエネルギーを、地域の活力として変換する「内部化」の作用因であつた。

希望の家に集まつてくる物資を有効活用するために結成された「こんばん会」は、建物を増築する際に、「十円でも」と資金集めに奔走している。そこには、「私たちはデイフリー神父さんの熱意に動かされた。地域ぐるみの厚生施設は長い間の夢でした。こんどの計画（新館増築）は私たちの手でやり遂げたい」「われわれの希望の家に生まれ変わっていく」という思いがあつた。そして、その思いが、一九六五年、新館開設といつかたちで実現する。地域に住みこみ、地域の住民となつて、この町の人たちと共に歩むことを望んだデイフリー神父は、所属するメリノール宣教会の人事により、新館完成を見届けてやむなく帰国する。その後を継いだのが、トマス・

マンティカ神父である。

マンティカ神父の写真は数多く残っているが、そのなかでも、保育園設立時の動画を記録しているのは、当時の学生セツルメントと東九条の地域青年たちが合作で作上げた自主映画『東九条』（制作・一九六八年、監督・山内政夫）だけかもしれない（写真D）。マンティカ

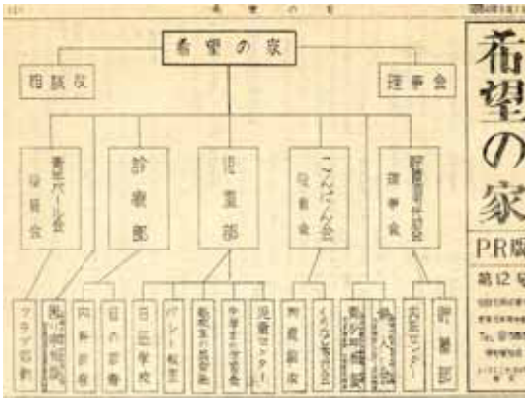
神父時代は、保育園設立のみならず、様々な事業展開を示す時期である。『希望の家新聞（PR版）』というものが発行されている。この時期の機構図を示す貴重な資料である（資料E）。このなかで、「理事会」とされているものがある。希望の家の定款が一九六七年に制定されているが、「第二種社会福祉事業団体」として、宗教法人法と社会福祉法に規定される事業を行う施設として位置付けられている。「理事会」は、地域の住民との共同運営という趣旨も含まれていたことから、実質的には「運営委員会」のことを指していた。当時、「社会福祉団体希望の家」「社会福祉法人希望の家」「社会福祉希望の家」といった表現が使われていることから、語用と法的存在形態には「ズレ」があつた。それでも確かに、希望の家の運営実態とその後の独立法人化の指向性を、ここに読み取ることができると思われる。それを示していたのは、『LENS記録』（一九七四年）と題された住民と施設関係者が合同で行つた研修の記録からであつた。

自主的な社会事業

宗教法人カトリック京都司教区、社会福祉法人カリス会の責任者は京都教区の司教である。宗教法人法第二条には、「この法律において「宗教団体」とは、宗教の教義をひろめ、儀式行事を行い、及び信者を教化育成することを主たる目的とする」という規定がある。



写真D



資料E

宗教行事を重視するというキリスト者の宗教性と、貧困や火災など目のまえに起こっている地域の課題を重視せざるを得ない住民（地域性）との葛藤。このような関係に規定されながら、さらなる「地域化」と「内部化」の作用は働いていた。一九六八年から始まった「老人の集い」は、「老人クラブ」（希望の家さきずな会）に発展し、「家庭奉仕委員」（ホーム・ヘルパー）とともに、寝たきりにある高齢者の家を訪れ、生活相談・健康相談にも乗り出している。「自主性と地域社会の活動参加」を目指し、老人福祉の担い手を指向した高齢者が、この時期から主体性を発揮してい

た。

「希望の家事業発展の為自主的に協力し、趣味、クラブ活動を通じて青年同志の友情と親睦を図ろう」と「青年パール会」というグループも結成されている。「私は青年たちが好きです」というマンティカ神父の意向は、「青年室」に結実する。そして、多くの青年たちが、希望の家を拠点に活動を行った。それはまだ、児童館事業が始まる前であった。「カギっ子教室」をいち早く市から受託した希望の家では、一九六〇年代半ばから「児童部」を設置し、地域の子どもたちの放課後支援や補習学習、中高生たちのための学習会を行っていた。さらに、その上の世代に当たる10代後半から20代前半の青年たちのエネルギーは、ときに施設との緊張関係をもたらしほ

展開する。その問題意識に、部落差別、民族差別、地域（スラム）差別を射程に置いていた。そこには、一九六〇年代の半ばから積極的に地域に入り始めていた学生セツルメントたちとの共同実践と相克があった。「地域をモルモットにしている」。そのような厳しい批判を学生セツラーに向けながら、その情熱は、ときに地域の大人たちとも衝突を起こす。そんな青年たちにも包容力を持つて接していたのが、マンティカ神父であった。

特に、多くの火災が度重なった東九条北東部のなかで、最も先鋭的な闘争を展開したのは、「東九条青年会」であった。彼らは、希望の家の前の児童公園に溜まり、小学校・中学校での繋がりのなかから次第に仲間意識を形成し、行政責任を厳しく追及する糾弾闘争を

展開する。その問題意識に、部落差別、民族差別、地域（スラム）差別を射程に置いていた。そこには、一九六〇年代の半ばから積極的に地域に入り始めていた学生セツルメントたちとの共同実践と相克があった。「地域をモルモットにしている」。そのような厳しい批判を学生セツラーに向けながら、その情熱は、ときに地域の大人たちとも衝突を起こす。そんな青年たちにも包容力を持つて接していたのが、マンティカ神父であった。

このような地域のエネルギーを背景に、希望の家は一九七四年から社会福祉法人化に向けた準備を進める。そして、度重なる火災に対応するため、住民たちも「山王東部防災地区連絡協議会」を結成し、自主防災活動を通じて、町内会の力も少しずつ、まちづくりの本格化に向かっていく。

スラム対策と地域改善の動き

記念誌を作成するうえで、改めてその意味を定位したいと思っただけでなく、希望の家新聞への寄稿、青年祭を通じた支援等々。一筋縄ではいかない関係性が当時の町内会役職層を含めて存在した。その後も、青年会は別のかたちで活動を続け、次世代、次々世代へと受け継がれ、現在の中高生の集

現在まで続く施策の根拠と原点がある。住民側も行政側も、この原点を確認するところでは一致している。富井市長の方針に基づいて、小倉襄二同志社大学教授を中心に、東九条実態調査研究会が組織され、一九六九年に『東九条実態調査報告書』（以下、『報告書』）が作成されている。一九六〇年代半ばから活発に活動していた東九条生活と健康を守る会や学生セツラー、さらに、それらの団体とは相いれない町内会・希望の家までが調査に協力し、詳細に実態が把握され、最も重要な点である在日朝鮮人に対する差別問題が指摘され、不良住宅度と人口密度の高さ、貧困世帯や社会的マイノリティの集住といったことが、ようやく行政的な認識のレベルに乗せられたことになる。

私自身も、この富井市政期まで、東九条は行政施策的には「放置」されてきたと書いてきた^(注2)。特に、状況が似通っている被差別部落・同和地区と比較し、行政の不作為の問題を指摘してきたが、不良住宅地区として既に戦前から把握されていた東九条北東部には、京都共済会により公設質屋（一九二

四年）、共済会住宅（一九二六年）、第六社会館（一九三三年）が、建設され、京都協助会により協助会館（一九二五年）が建設されている。メインストリートである須原通の拡幅工事も行われ（一九三五、三八年）、内鮮融和を掲げ融和促進教育が国民学校で行われている。国家総動員の問題を孕みながらも、完全な不作為とはいえない歴史を持っていた事実を評価するのは、今後の作業となる。

ただ、国策にまで位置付けられた同和行政と比べると、見劣りがしていたのは否めなかった。東九条地域には、柳原町時代から崇仁地区の住民が土地を持っていたり、引越してきたり、事業を経営していたりしており、空襲に備えた防火帯確保のため、東九条に移動せざるを得なかった人々もいる。

『報告書』は、崇仁地区における改良事業の進展が、皮肉にも、崇仁地区に住む在日朝鮮人を南に追いやりに、さらに、東九条に住む被差別部落民の存在を見えなくさせていることを剔抉している。しかし、富井市政は第一期目で終わり、東九条対策のトーンは確実に落ちた。引き継いだ船橋求巳市長は、

部落解放運動との関係も強く、同和对策事業に重きを置いた。それが、『報告書』に基づいて作成された、『東九条地区社会福祉パイロットプラン（未定稿）』（以下、『パイロットプラン』）の未公開に關連しているのではないかと考えられる。さらに、この『パイロットプラン』の内容は、『報告書』に比べはるかに内容が後退し、わざわざ同和行政が第一だとし、東九条を文化も紐帯・連帯もない一般的な下層社会（「スラム」）と規定する不十分な内容のものであった。そこに存在する民族差別や地域住民の共同性、さらに、そのなかで重要な役割を果たす希望の家に対する認識の欠落があった。

一九七二年に建設された生活館は、そのなかでも唯一のスラム対策の証といえたが、二〇一〇年度を持って、十分な総括がないまま廃止される予定である。その事業の多くは、実質的には希望の家に委託されるかたちで行われ、およそ地域施設として機能したとは言えない難いものだった。そして、一九六〇年代同様、一九七〇年代から一九八〇年代にかけても、引き続き、火災が続き、既に始まりつつ

あった高齢化とあいまって（一九八五年の『東九条地区整備に関する調査報告書』によれば、高齢者率は京都市に比べ一・五倍の二五・五%であった）、行政の不作為がもたらす東九条地域の困難は増していった。その状況下で、青年たちの激しい糾弾闘争があった。そして、青年たちは一線を画し、行政との協議も交えながら、地域改善を進めるため、一九八二年、北東部の町内会が結束して「東九条改善対策委員会」（以下、委員会）を設立するのである。

まちづくりと社会福祉のセンターとして

地域改善の動きに全面的に協力したのは、希望の家である。京都教区司祭（神父）として初の所長となった越知健神父は、自ら委員会の事務局を担い、希望の家職員に、まちづくりへの積極的な参加を呼び掛けた。そして、単に希望の家が前面にでるのではなく、着々と進めてきた社会福祉法人化（『希望の家福祉会』）は、一九八四年度に実現する計画であった。理事長には、一九六〇年代から希望の家の「理事」として関わりを持ち、そ

の後、保育園園長を勤め、現在、カリタス会理事長を勤める村上真理雄神父が就任することになってきた。この理事会には、地域からも理事が入り、いよいよ運営委員会方式から、実質的な理事会体制「地域施設としての体裁を整える現実性がピークに達していたのである。

その機運の醸成は、村上神父と越知神父の強い要請もあり、在日大韓基督教会に所属し、東九条出身であった崔忠植牧師を、保育園園長に招聘している点にも窺える。その流れのなかで、保育園は『共生に生きる喜び 地域に根差した保育園の20年』（一九八七年）という記念誌を、保育園職員の一周年に渡るハードな作業のなかで製作している。地域と共に進む「多文化共生保育」という理念が明確に打ち出され、それは、希望の家にも影響を与え、マダン劇や九条オモ二ハツキヨの担い手が生れ、地元出身の在日朝鮮人が職員として採用され、保育園・児童館ともに、多文化共生を日々の実践のなかで意識化していくようになる。

再び、小倉教授を中心とした識者による実態調査が行われ、『東

九条地区整備に関する調査報告書

実態分析と提言』が提出され（一九八五年）、法人化など、希望の家を地域福祉センター（総合セツルメント）と位置付け、住環境整備とまちづくりの進展の必要性を喚起した。施策は一旦は停滞するものの、一九八九年に発覚した地上げを契機に、住民のまとまりとエネルギーが「東九条を守る会」に結実し、

「東九条地区改善中・長期計画（案）」をもとに、一九九〇年代以降に進むコミュニティ住環境整備事業（住宅市街地総合整備事業）の具体化に繋がる。そして市営住宅・特別養護老人ホーム・デイサービスの合築（一九九五年）、二棟に渡る市営住宅建設（二〇〇二・二〇〇四年）、多文化共生・地域交流事業（二〇〇一年度以降）といった施策を現実のものとする。

学童の親たちが保護者会をつくり、若い住民と町内会活動を担ってきた住民の間に接点が出来たときも、住民の力を一つにする希望の家が役割を果たしていた。崔園長などが中心となり開始された東九条現場研修（一九八二年）は、単にキリスト者の養成にとどまらない、地域改善の担い手を内外の

交流と接点を通じて育成する場となり、その成果は現在にも息衝いている。現場研修を担った「HEAT」は、東九条松ノ木町40番地（現在の東松ノ木町）でも住民を支え、「東九条まちづくりサポートセンター」として衣替えし、十年を迎えた。記念誌は、これらの活動を担った人たちの多大な協力を得ながら進め、発行まで辿りついた（二〇一〇年二月）。

50周年記念誌を作成するなかで、改めて思い知らされたのは、行政施策のなかで引かれる分断線、それにより、人々の記憶や集合的実践のなかで過剰に意味付けられる分断線が、絶えず生産／再生産され続けているということである。そして、その境界線を横断する実践も同様に、歴史のなかに着実に痕跡を残しているということ。崇仁と東九条、部落と在日、「スラム」と「不法占拠地域」……等々（注）。現代史を記述するということは、その可能性と課題を再提示することにあり。本記念誌がその水準に達したかどうか。その真価が問われるのは、これからである。

注

（1）同記念誌の作成過程で、筆者自身の考え方として書ききれない部分であったキリスト者と地域住民の関係性については、拙稿「スラム地域における住民主体とキリスト者の戦略 京都市東九条を事例に」（『地域社会学年報』第二号、二〇一〇年）がある。

（2）拙稿「行政権力による排除の再編成と住民運動の不／可能性 京都市東九条におけるスラム対策を事例に」（『社会学研究』第一号、二〇〇九年）。

（3）拙稿「不法占拠地域」における住民運動の条件 京都市東九条を事例に」（『日本都市社会学年報』第二七号、二〇〇九年）において、「0番地」と称された東九条40番地と四ヶ町、崇仁地区の比較分析を試みた。

（付記）

『地域と共に50年 希望の家創立50周年記念誌』（二〇一〇年二月刊）は、京都部落問題研究資料センターに寄贈しています。ぜひ、手にとってご覧いただければと思います。

章) 部落差別の歴史的性格を考える 藤沢靖介

部落解放 630号(解放出版社刊, 2010.5): 1,050円
人権キーワード2010

部落解放 631号(解放出版社刊, 2010.6): 630円

特集 刑事司法のゆくえ 裁判員制度開始1年

裁判員制度開始から1年を経て 西村健/記者がみた裁判員制度1年 浮かび上がる効果と課題 玉木達也/性犯罪被害と裁判員制度 雪田樹理/障害者と裁判員裁判 「障害者刑事弁護サポートセンター」の取り組みについて 辻川圭乃

本の紹介

八木晃介著『差別論研究 部落問題の自然史的考察』 三浦耕吉郎/前田拓也著『介助現場の社会学 身体障害者の自立生活と介助者のリアリティ』 桜井厚

中上健次の「路地」理解とその作品 2009年熊野大学夏期特別セミナー講座から 守安敏司

在日朝鮮人女性の「語り」と「沈黙」 夜間中学生との対話から 山根実紀

不動産業で直面する部落差別 企業人権啓発担当者の部落問題フィールドワークから 黒坂愛衣

部落解放 632号(解放出版社刊, 2010.7): 630円

特集 軍事基地負担と沖縄差別

本の紹介

『不平等の謎 憲法のテオリアとプラクシス』(遠藤比呂通著) 川上隆志/『スポーツ立国の虚像 スポーツを殺すもの2』(谷口源太郎著)/『反冤罪』(鎌田慧著)/『取調べ可視化論の現在』(小坂井久著)/『元気のもととはつながる仲間』(外川正明著)/『発達障害チェックシートできました』(すぎむらなおみ+「しーとん」)/『禁じられた江戸風俗』(塩見鮮一郎著)

私が文字を獲得するまで 53歳で定時制高校を卒業した吉山トシ子さん 編集部

部落・差別の歴史 そのとらえ直しと論点 26 第4章(終章) 部落差別はどう議論されてきたか(続) 藤沢靖介

部落解放研究くまもと 59号(熊本県部落解放研究会刊, 2010.3)

特集 近代史のなかの宗教と部落

近代史のなかの宗教と部落 黒衣同盟とその周辺など 廣岡浄進

リレー特集 部落差別の現実と課題

差別発言から問われ続けていること 森山英治/来民開拓団の心を引き継ぐ 山野博典

本の紹介

『ナチス体制下におけるシンティとロマの大量虐殺』 花田昌宣/のびしょうじ『皮革の歴史と民俗』 山本尚友

部落解放ひろしま 87号(部落解放同盟広島県連合会刊, 2010.7): 1,000円

特集 部落差別の歴史と闘い 現在を考えるために 1

「解放新聞広島県版」2000号発刊を記念して 小森龍邦
部落問題研究 192(部落問題研究所刊, 2010.4): 1,111円

転向過程における北原泰作の思想と行動 朝治武

大阪の公文書館問題を考える 大阪府公文書館の移転問題を中心に 島田克彦

書評 成澤榮壽著『島崎藤村「破戒」を歩く』(上)(下)をめぐって 川端俊英

史料紹介 北原泰作文書 3 井元麟之「証言書」・山本政夫「証言書」 本井優太郎

本願寺史料研究所報 40号(本願寺史料研究所刊, 2010.5)

近現代における本願寺寺務簿冊 「府下宇治郡山科村大字上花山字旭山火葬場、外一」について(下) 左右田昌幸

ミュージアム知覧 紀要・館報 12号(南九州市教育委員会文化財課刊, 2010.3)

企画展「獣骨を運んだ仲覚兵衛と薩南の浦々」追録 坂元恒太

リベラシオン 137(福岡県人権研究所刊, 2010.3): 1,000円

史料紹介 新聞に見る部落問題関係史料 1 『全九州水平社史料集(仮)』草稿より 『全九州水平社史料集(仮)』編集委員会

史料紹介 高松差別裁判糾弾闘争における「馬場公会堂事件」に関する史料(下) 石瀧豊美

大衆的活動の闘士・大野甚〜部落解放運動の原像〜 森山沾一

図書紹介 『青少年の治療・教育的援助と自立支援』(土井高德著) 稲月正

リベラシオン 138(福岡県人権研究所刊, 2010.6): 1,000円

特集 部落史授業は今

近世史の授業に取り組むにあたって 笠原清範/部落史学習を進めながら多くの出会いがありました 宮元信一

抱樸館福岡の建設から学ぶこと 排除の論理をどう超えるのか 西川義夫

福岡部落史研究会創立35周年・福岡県人権研究所設立5周年記念企画展をふりかえる

田原春次再考 聞き取りと新資料から 町田聡

史料紹介 新聞に見る部落問題関係史料 2 『全九州水平社史料集(仮)』草稿より 『全九州水平社史料集(仮)』編集委員会

歴史学研究 865号(歴史学研究会刊, 2010.4)

書評 朝治武『アジア・太平洋戦争と全国水平社』 関口寛

援～ 伊藤悠子

人権文化を拓く 154 部落史の見直しのひとつは「にんげんの生きる姿」を伝えること 藤野徳三

であい 578 (全国人権教育研究協議会刊, 2010.5) : 150円

ケアと教育はリンクする～子どもの持つ回復力の力と支援～ 2 伊藤悠子

性は「わたし」です～トランスジェンダーの生徒とかかわって～ 喜多村久美子

人権文化を拓く 155 ドーナツ型ではなく星型人権教育を 松下一世

であい 579 (全国人権教育研究協議会刊, 2010.6) : 150円

人権文化を拓く 156 「受刑者」と「世間」との関係いまむかし 安竹貴彦

[長崎人権研究所] 研究所情報 52号 (長崎人権研究所刊, 2010.3)

人種起源ということ 阿南重幸

ねっとわーく京都 258 (ねっとわーく京都21刊, 2010.7) : 500円

同和行政レポート “求む！部落民情報” 福知山市教委の＜同和＞追跡調査 寺園敦史

はらっぱ 305 (子ども情報研究センター刊, 2010.4)

サバイバル手帳 17 野中広務を見つめる人たち 辛淑玉

はらっぱ 306 (子ども情報研究センター刊, 2010.5)

特集 障害があってもなくても、ともに学びたい。障害のある子の受験・進学を考える

はらっぱ 307 (子ども情報研究センター刊, 2010.6)

朝鮮高級学校排除は時計の針が止まるような感覚～朝鮮学校の改革は暖かく見守ってほしい～ 金光敏

反差別・人権交流センター(絆)通信 創刊号(反差別・人権交流センター(絆)刊, 2010.4)

結成集会を開催しました！

ヒューマンJournal193 (自由同和会中央本部刊, 2010.6) : 500円

融和運動の再評価 9 内部自覚と自力更生 山本政夫のこと 宮崎学

ヒューマンライツ 265 (部落解放・人権研究所刊, 2010.4) : 525円

大学における、これからの同和・人権教育、研究のために 若手研究者が先輩研究者に学び・考える 3 川向秀武先生 熊本理抄

「母」という字が好き～ETV特集「なまえをかいた～吉田一子・八四歳」を観て 浮穴正博

ヒューマンライツ 266 (部落解放・人権研究所刊, 2010.5) : 525円

走りながら考える 私の生い立ち・パート1 存在感と目標に支えられて 北口末広

大学における、これからの同和・人権教育、研究のため

に 若手研究者が先輩研究者に学び・考える 4 内田雄造先生 熊本理抄

ヒューマンライツ 267 (部落解放・人権研究所刊, 2010.6) : 525円

走りながら考える 私の生い立ち・パート2 自立意識を育ててくれた 北口末広

人権意識調査報告書のウェブ公開 益田圭

ひょうご部落解放 136 (ひょうご部落解放・人権研究所刊, 2010.3) : 700円

特集 兵庫の隣保館は今

本の紹介

『とことん！部落問題』(角岡伸彦著) 本郷浩二 / 『1945年夏 満州 七虎力の惨劇』 『1945年夏 はりま 相生事件を追う』(こちまさこ著) 竹本貞雄

研究所の本 『人権歴史マップ 播磨版』 北山雅博

ひょうご部落解放 137 (ひょうご部落解放・人権研究所刊, 2010.6) : 700円

特集1 被差別部落女性の実態調査から

特集2 韓国併合100年 在日コリアンの100年

本の紹介

『検証・狭山事件 女子高生誘拐殺人の現場と証言』(伊吹隼人著) / 『生きていくための短歌』(南悟著) / 『差別原論 <わたし>のなかの権力とつきあう』(好井裕明著)

部落解放 628号(解放出版社刊, 2010.4) : 630円

特集 人権教育の今後 人権教育の取組状況調査をふまえて

本の紹介 上原善広著『日本の路地を旅する』 高澤秀次 「複合下層」としての都市型部落 2009年度大阪市日之出地区実態調査から 岸政彦

「差別禁止法」の制定を求める！ 奥田均

部落・差別の歴史 そのとらえ直しと論点 24 第3章 近世における社会的位置 9 領主支配・政治権力、身分(集団)と身分制度 4 藤沢靖介

部落解放 629号(解放出版社刊, 2010.5) : 630円

特集 おとなの学び・識字

生活の支え、居場所として 識字・日本語教室調査から見てきたもの 古川正志 / 識字学級発祥の地「福岡県川崎町浦の谷」と材木貞子 松崎一 / 大きな反響に励まされて 広報誌に掲載された「小平尾さくら識字学級」 関道代 / 一子さん、ありがとう。 ETV特集「なまえをかいた～吉田一子・84歳」を制作して 岩田真治

東京音楽通信 惨めで屈辱的な生活の先 アメリカ映画『プレシャス』 藤田正

本の紹介 『排除と差別の社会学』(好井裕明編) 足立重和

母と出会い直した私 ムラの高齢者福祉施設に勤めて 吉田あけみ

部落・差別の歴史 そのとらえ直しと論点 25 第4章(終

- 出発する」ということについて 7 岩本孝樹
 同朋運動史の窓 5 左右田昌幸
 水平社博物館研究紀要 12号(水平社博物館刊, 2010.3): 1,000円
 初期奈良県水平社の糾弾闘争と行政対応 南葛城郡を中心に 駒井忠之
 大石誠之助と大逆事件 金井英樹
 月刊スティグマ 165号(千葉県人権啓発センター刊, 2010.3): 500円
 明治維新後遺症としての日本人...差別問題をすべての人のものにするための試論 10 「穢れ」「清め」の人間観...障害者を例にして 鎌田行平
 月刊スティグマ 166号(千葉県人権啓発センター刊, 2010.4): 500円
 明治維新後遺症としての日本人...差別問題をすべての人のものにするための試論 11 前近代日本文化の全面否定としての明治維新 鎌田行平
 月刊スティグマ 167号(千葉県人権啓発センター刊, 2010.5): 500円
 特集 沖縄レポート100回
 東日本同和教育実践交流会に向けて「部落の子どもたちに部落をどのように伝えるか」を巡る論議の必要性 鎌田行平
 明治維新後遺症としての日本人...差別問題をすべての人のものにするための試論 12 「食肉奨励政策」がなぜ部落差別を強化したか 鎌田行平
 世界人権問題研究センター研究紀要 15号(世界人権問題研究センター刊, 2010.3)
 強制失踪なき世界へ 国際人権運動の光芒 阿部浩己
 裁判所にアクセスする権利の適用範囲 1 欧州人権条約第6条1項と自由権規約14条1項の比較 薬師寺公夫
 地域的慣習規律に基づく人権侵害と人権保障 本間浩
 韓国映画における検閲と抵抗の軌跡 高賛侑
 市民性教育としての人権教育について OECDの「キー・コンピテンシー」を手がかりに 平沢安政
 江戸時代知識人の壬辰倭乱批判 柏原益軒と乳井眞の場合 仲尾宏
 門田秀夫氏寄贈資料目録 2 研究第2部
 民族まつり/マダンの系譜 藤井幸之助
 地域社会学会年報 22集(地域社会学会刊, 2010.5)
 スラム地域における住民主体とキリスト者の戦略 京都市東九条を事例に 山本崇記
 月刊地域と人権 314(全国地域人権運動総連合刊, 2010.4): 350円
 福岡県久留米市立高校教諭逮捕に係わる「中傷文」の真相究明申し入れ 植山光朗
 月刊地域と人権 315(全国地域人権運動総連合刊, 2010.5): 350円
 介護事業から人権と福祉行政を考える 丹波正史
 国連人種差別撤廃委員会と部落問題の議論 新井直樹
 地域と人権 1087号(全国地域人権運動総連合刊, 2010.4.15): 150円
 福岡・立花町「解同見解」批判 下 住民不信の「解同」、行政は猛省
 国民的融合論との対話 部落問題解決への理論的軌跡と展開 5 丹波正史
 地域と人権 1088号(全国地域人権運動総連合刊, 2010.5.15): 150円
 国民的融合論との対話 部落問題解決への理論的軌跡と展開 6 丹波正史
 地域と人権京都 570号(京都地域人権運動連合会刊, 2010.4.1): 150円
 記録 総点検委員会報告を『点検』するシンポジウム 10
 地域と人権京都 571号(京都地域人権運動連合会刊, 2010.4.15): 150円
 記録 総点検委員会報告を『点検』するシンポジウム 11
 地域と人権京都 572号(京都地域人権運動連合会刊, 2010.5.1): 150円
 記録 総点検委員会報告を『点検』するシンポジウム 12
 地域と人権京都 573号(京都地域人権運動連合会刊, 2010.5.15): 150円
 記録 総点検委員会報告を『点検』するシンポジウム 13
 地域と人権京都 574号(京都地域人権運動連合会刊, 2010.6.1): 150円
 記録 総点検委員会報告を『点検』するシンポジウム 14
 地域と人権京都 575号(京都地域人権運動連合会刊, 2010.6.15): 150円
 記録 総点検委員会報告を『点検』するシンポジウム 終
 ちくま 469(筑摩書房刊, 2010.4): 100円
 青春の光芒 異才・高橋貞樹の生涯 35 第八章 密出国
 でモスクワ留学へ 4 沖浦和光
 ちくま 470(筑摩書房刊, 2010.5): 100円
 青春の光芒 異才・高橋貞樹の生涯 36 第八章 密出国
 でモスクワ留学へ 5 沖浦和光
 『賀川ハル史料集』刊行について 1 賀川豊彦没後50年
 三原容子
 ちくま 471(筑摩書房刊, 2010.6): 100円
 青春の光芒 異才・高橋貞樹の生涯 37 第八章 密出国
 でモスクワ留学へ 6 沖浦和光
 『賀川ハル史料集』刊行について 2 史料集をつくる 三
 原容子
 であい 576(全国人権教育研究協議会刊, 2010.3): 1
 50円
 人権文化を拓く 153 外国にルーツをもつ教職員が悩み
 や課題を共有できるネットワーク設立 韓秀根
 であい 577(全国人権教育研究協議会刊, 2010.4): 1
 50円
 ケアと教育はリンクする~子どもの持つ回復力の力と支

坂倉加代子

いのちを生きる 32 人間について深く感じ、広く考える
日々 長谷川洋子

記憶の旅から明日へ 写真と文 小林茂

こりあんコミュニティ研究会通信 5号(こりあんコ
ミュニティ研究会刊, 2010.5)戸手四丁目河川敷地区の暮らしの記憶 2 まちの形成過
程 新井信幸

龍王宮実測調査報告 黒木宏一

佐賀部落解放研究所紀要 27(佐賀部落解放研究所刊,
2010.3)部落差別は生きている 身近の差別事件と私の経験から
花田昌宣

夢のシンポジウム・部落委員会活動の再検討 朝治武

史料紹介 『口達録』4 中村久子

佐久市五郎兵衛記念館古文書調査報告書 第3集(佐
久市教育委員会刊, 2010.3)五郎兵衛による市村新田開発の歴史を探る 佐久市常田・
原野家文書の紹介を兼ねて史料紹介 明治維新の激動を伝える史料 慶応四年(186
8)の五郎兵衛新田村「御用留書」2

雑学 36号(下之庄歴史研究会刊, 2010.5): 800円

差別観念克服のために文化史観で新たなイメージづくり
上野茂

ゼッポーとキボーの教育論 吉田智弥

今、夜間中学の生徒さんが大変です 吉川弘

「坂の上の雲」の歴史観を問う 金井英樹

記紀新解釈・神代上 辻本正教

中上健次私論ノート21 高桑健二

闘病日誌 半年に三度の手術 上野茂

人権21 調査と研究 205(おかやま人権研究センター
刊, 2010.4): 650円

特集 派遣切りその後

人権21 調査と研究 206(おかやま人権研究センター
刊, 2010.6): 650円

特集 北欧福祉国家論

映画紹介 「インビクタス 負けざる者たち」 硫黄島
からヨハネスブルグへ 平島正司人権教育研究 18号(花園大学人権教育研究センター
刊, 2010.3)

「戦争に反対する」行為とは何か 吉田智弥

「結婚」する権利? 日本の社会制度からみる「同性婚」
の問題 堀江有里

逸脱の医療化と医療の逸脱化 八木晃介

慈悲と衆生の間 島崎義孝

障害者が少なく、働く障害者が多い 日本における人び
との働き方 安田三江子

痴漢冤罪の可能性がある事案 1 脇中洋

神話的常識を疑う 奈良県吉野郡の杉の節約の神話、尻

尾のある人間の神話、犬の神話から 丸山顕徳

研究ノートの覚書のようなもの「私的、今は昔のメモリー」
7 障害者市民、かく闘えり! 河野秀忠人権と部落問題 800(部落問題研究所刊, 2010.4):
630円文芸の散歩道 人権教育指導を行う丑松 金子洋文脚色
『破戒』 秦重雄人権と部落問題 801(部落問題研究所刊, 2010.5):
630円

特集 憲法と国民生活

文芸の散歩道 夏目漱石と伊藤博文暗殺 水川隆夫

人権と部落問題 802(部落問題研究所刊, 2010.6):
630円

特集 人権教育を問う

文芸の散歩道 音楽座ミュージカル『泣かないで』
(遠藤周作著『わたしが・棄てた・女』より)を観て
松井活人権と部落問題 803(部落問題研究所刊, 2010.7):
630円

特集 女性と人権

結婚と部落問題 村崎秀子

現地報告

大阪府 公営住宅公募の取り組み 大阪市浪速区の事例
を中心に 谷口正暁/福岡県 不可解な二つの「差別」事
件 福岡県立花町の自作自演の差別はがき事件と久留米
市立高校教諭の差別脅迫事件 植山光朗古川康彦著『新たなまちづくりに挑む』に思う 森本良
子文芸の散歩道 近世文芸に著された賤民 お杉・お玉 小
原亨季刊人権問題 359(兵庫人権問題研究所刊, 2010.
4): 735円

福岡県立花町えせ差別事件で四面楚歌 植山光朗

人権問題研究 32号(大阪市立大学人権問題研究会刊,
2010.3): 1,500円

大山コザ市政と琉球列島米国民政府 山崎孝史

医学モデルによる近代日本の社会秩序構築 洪沢栄一と
光田健輔が果たした役割 要田洋江都市型被差別部落への転入と定着 A地区実態調査から
齋藤直子更生施設による地域貢献活動を通して作られる社会的排
除について 李恵子

近代における部落の経済的二極分解 上杉聡

フィリピン国籍の生徒の進路保障 学習支援から見え
る臨床的考察 大賀喜子人権問題研究センター高知県東洋町現地研修(2009年3
月)の記録 齋藤直子

振興会通信 91号(同和教育振興会刊, 2010.3)

御同朋の教学 29「御同朋の教学」と「差別の現実から

- 同和問題再考 113 キリスト者、あんたもだ！（下） 田村正男
- 部落差別の現実 94 吉本隆明差別表現図書 3 江嶋修作
語る・かたる・トーク 184（横浜国際人権センター刊、2010.6）：500円
- わたしと部落とハンセン病 55 林力
- 信州の近世部落の人びと 61 斎藤洋一
- 同和問題再考 114 賀川豊彦と部落問題 1 田村正男
- 部落差別の現実 95 吉本隆明差別表現図書 4 江嶋修作
かわとはきもの 151（東京都立皮革技術センター台東支所刊、2010.3）
- 靴の歴史散歩 96 稲川實
- 皮革関連統計資料
- かわとはきもの博物館めぐり 8 日本はきもの博物館 2 福原一郎
- K G人権ブックレット 14・15（関西学院大学人権教育研究室刊、2010.3）
- 絆が人を生かすから 今日における二つの貧困とホームの創造 奥田知志
- キャンパス内における勧誘と信教の自由 山口貴士
- 現代の日本の〈貧困〉が私たちに教えるもの 富樫匡孝
- 立ち上がりつながるマイノリティ女性のパワー結実 女性差別撤廃委員会日本報告書審議と日本への勧告 原由利子
- 関西学院大学人権研究 14号（関西学院大学人権教育研究室刊、2010.3）
- 国連文書にみる人権概念：普遍性と多様性 園田明子
- 障害モデル論の変遷と今後の課題について 松岡克尚
書評
- 外国人研修生権利ネットワーク編『外国人研修生時給300円の労働者 2 使い捨てを許さない社会へ』 榎本てる子 / 池谷孝司編著『死刑でいいです 孤立が生んだ二つの殺人』 舟木譲
- 人権教育における「視覚的なもの」の可能性と課題
「分かりやすさ」に潜む陥穽をめぐって 阿部潔
- 関西外国語大学人権教育思想研究 13号（関西外国語大学人権教育思想研究所刊、2010.3）
- 地形と差別 差別意識解消のための視点 浅野浅春
- 川崎市人権オンブズパーソンについて 平成20年の報告書を中心に 久禮義一・平峯潤
- 生活保護制度の現状と課題 久禮義一・平峯潤
- 「日本人」を考える～古代日韓交渉史から～ 佐古和枝
資料 日本映画人権関連小一覽
- 関西大学人権問題研究室紀要 59号（関西大学人権問題研究室刊、2010.3）
- 隠蔽される部落と一面的な部落観 カムアウトによる部落の可視化という戦略 石元清英
- 大坂町奉行所の刑事判例 3 大坂城代土屋氏御用留による 藤原有和
- 発達障害児支援における心理職の役割 大島吉晴
- 啓蒙教育の一記録と回顧 「人権を考える」2008/秋 関西大学より 上田豊志美
- 季節よめぐれ 254号（京都解放教育研究会刊、2010.3）
- ケータイ・インターネットと子どもたちの人権 黒田恵裕
- 京都市政史編さん通信 37号（京都市市政史編さん委員会刊、2010.3）
- 『京都市政史第1巻 市政の形成』を拝読して 山本篤史
[京都女子大学宗教・文化研究所]研究紀要 23号（京都女子大学宗教・文化研究所刊、2010.3）
- 戦前期京都市東七条・東九条における事業所の立地状況 高野昭雄
- 京都部落問題研究資料センター通信 19号（京都部落問題研究資料センター刊、2010.4）
- 本の紹介 山路興造著『京都 芸能と民俗の文化史』 村上紀夫
- 上原善広著『日本の路地を旅する』 竹森健二郎
史料紹介 『京都日出新聞』連載の「山家」記事について 中村久子
- 収集逐次刊行物目次（2010年1月～3月受入）
- [京都府立総合]資料館紀要 38号（京都府立総合資料館刊、2010.3）
- 京都町奉行所関係資料集 二 古久保家文書 「天和三年御公用諸事日記」
- グローブ 61（世界人権問題研究センター刊、2010.4）
- 『山本政夫著作集』を読む 手島一雄
- 外国人はやはり“害国人”なのだろうか 外国人登録法廃止に思う 田中宏
- 人身取引 需要の抑制が最大の課題 吉田容子
- 在日ブラジル人の移動と教育 山ノ内裕子
- 国際人権ひろば 91（アジア・太平洋人権情報センター刊、2010.5）：350円
- 特集 問われる日本の人種差別
- こべる 206（こべる刊行会刊、2010.5）：300円
- ひろば131 無限に広がる世界 点字 大山口博子
- 自分史のこころみ 7 自分のいまを見つめる 町田宏美
- いのちを生きる 31 三年ぶりの卒業式 長谷川洋子
- 記憶の旅から明日へ 写真と文 小林茂
- 2009年度『こべる』会計報告
- こべる 207（こべる刊行会刊、2010.6）：300円
- ひろば132 韓国「併合」100周年と現代日本社会 「脱植民地化」論雑感 井口和起
- 最近読んだ本から22 マイノリティであることを考える 李清美『私はマイノリティ あなたは？』 金光敏
- 記憶の旅から明日へ 写真と文 小林茂
- こべる 208（こべる刊行会刊、2010.7）：300円
- 尼崎だより 33 人に関わるということ 中村大蔵
- 四日市から 20 学生時代と今をつなぐ「ひとすじの道」

今週の1冊 『ルポ戦場出稼ぎ労働者』（安田純平著）
 解放新聞 2465号（解放新聞社刊，2010.4.12）：80円
 ぶらくを読む 50 革命家・文人にして部落同伴者 梅川文男 湧水野亮輔
 解放新聞 2466号（解放新聞社刊，2010.4.19）：80円
 今週の1冊 『教育再定義への試み』（鶴見俊輔著）
 解放新聞 2467号（解放新聞社刊，2010.4.26）：80円
 今週の1冊 『DV・被害者のなかの殺意』（北村朋子著）
 解放新聞 2468号（解放新聞社刊，2010.5.3）：120円
 山口公博が読む今月の本
 『清水次郎長 幕末維新と博徒の世界』（高橋敏著）/
 『悪と日本人』（山折哲雄著）/ 『愛妻日記』（重松清著）
 ぶらくを読む 51 屠畜場システムの溶解という現実 湧水野亮輔
 解放新聞 2469号（解放新聞社刊，2010.5.10）：80円
 映画「プレシャス」（リー・ダニエルズ監督）中村一成
 解放新聞 2470号（解放新聞社刊，2010.5.24）：80円
 解放の文学 49 大逆事件と向き合う 森鷗外と短編『沈黙の塔』 音谷健郎
 解放新聞 2471号（解放新聞社刊，2010.5.31）：80円
 山口公博が読む今月の本
 『異議ありの声』（立松和平著）/ 『死者の書 身毒丸』（折口信夫著）/ 『小説の読み方 日本の近代小説から』（猪野謙二編）
 解放新聞 2472号（解放新聞社刊，2010.6.7）：120円
 今週の1冊 『部落に生きる 部落と出会う』（部落解放同盟東京都連合会刊）
 ぶらくを読む 52 もうひとつの部落解放運動 自治研ならの吉田智弥 湧水野亮輔
 解放新聞 2473号（解放新聞社刊，2010.6.14）：80円
 解放の文学 50 明治の曲り角に反応 石川啄木と短歌『九月の夜の不平』 音谷健郎
 解放新聞 2475号（解放新聞社刊，2010.6.28）：80円
 山口公博が読む今月の本
 『失くした季節 金時鐘四時詩集』（金時鐘著）/ 『茜色の空』（辻井喬著）/ 『坊っちゃん』（夏目漱石著）
 解放新聞大阪版 1823号（解放新聞社大阪支局刊，2010.5.3）：70円
 大阪の部落史を歩く 11 ホルモン食の始まり 和泉南王子村・河内北条 のびしょうじ
 解放新聞大阪版 1830号（解放新聞社大阪支局刊，2010.6.28）：70円
 大阪の部落史を歩く 12 府域の部落はどうやって形成されたのか 1 南王子村の成立 のびしょうじ
 解放新聞改訂版 398号（部落解放同盟改訂支部刊，2010.4.20）
 一方的なコミセン転用計画の策定について安井つとむ議

員と山本ひろふみ議員に聞く
 解放新聞改訂版 399号（部落解放同盟改訂支部刊，2010.5.20）
 ついに部落の子どもたちを切り捨てた京都市教育委員会 改訂版『《学校における》人権教育を進めるにあたって』の撤回を求める！
 解放新聞京都市版 223号（部落解放同盟京都市協議会刊，2010.5）：150円
 コミセン第2次転用計画素案各地域「説明会」
 解放新聞東京版 737号（解放新聞社東京支局刊，2010.4.1）：90円
 東京を中心とする部落・差別の歴史 16 「解放令」・身分制度の撤廃と社会の再編 藤沢靖介
 解放新聞東京版 738号（解放新聞社東京支局刊，2010.4.15）：90円
 東京を中心とする部落・差別の歴史 17 近代社会の展開と部落・差別の動向 藤沢靖介
 解放新聞東京版 740号（解放新聞社東京支局刊，2010.5.15）：90円
 東京を中心とする部落・差別の歴史 18 皮革産業の強制移転など政府・東京府の対応 藤沢靖介
 解放新聞東京版 742号（解放新聞社東京支局刊，2010.6.15）：90円
 東京を中心とする部落・差別の歴史 19 日本近代と部落差別 藤沢靖介
 解放新聞福岡県版 445号（解放新聞社福岡支局刊，2010.4）：50円
 差別はがき偽造事件で第三者提言委 記者会見
 解放新聞福岡県版 446号（解放新聞社福岡支局刊，2010.5）：50円
 運動・組織の再検証を！ 提言書を学習
 語る・かたる・トーク 181（横浜国際人権センター刊，2010.3）：500円
 わたしと部落とハンセン病 52 林力
 信州の近世部落の人びと 58 斎藤洋一
 同和問題再考 111 ヒンズーの差別を「反面教師」に！ 田村正男
 部落差別の現実 92 吉本隆明差別表現図書 1 江嶋修作
 語る・かたる・トーク 182（横浜国際人権センター刊，2010.4）：500円
 わたしと部落とハンセン病 53 林力
 信州の近世部落の人びと 59 斎藤洋一
 同和問題再考 112 キリスト者、あんたもだ！（上） 田村正男
 部落差別の現実 93 吉本隆明差別表現図書 2 江嶋修作
 語る・かたる・トーク 183（横浜国際人権センター刊，2010.5）：500円
 わたしと部落とハンセン病 54 林力
 信州の近世部落の人びと 60 斎藤洋一

収集逐次刊行物目次 (2010年4月～6月受入)

～各逐次刊行物の目次の中から部落問題関係のものを中心にピックアップしました～

- 明日を拓く 82・83 (東日本部落解放研究所刊, 2009.12) : 2,100円
 特集 東日本における同和教育の課題
 書評 有元正雄著『近世被差別民史の東と西』 藤井寿一
 あすばる 22 (甲賀・湖南人権センター刊, 2010.6)
 セパドからウリハッキョマダンへ 徳永信一
 IMADR-JC通信 162 (反差別国際運動日本委員会刊, 2010.5) : 750円
 国連人種差別撤廃委員会における活動報告～高校無償化からの朝鮮学校外し問題を中心として 師岡康子
 ウィングスきょうと 97号 (京都市女性協会刊, 2010.4)
 図書情報室新刊案内
 『働く女性のためのアサーティブコミュニケーション』 (アン・ディクソン著) / 『絵本日本女性史 原始・古代・中世』 (野村育世文・石井勉絵)
 ウィングスきょうと 98号 (京都市女性協会刊, 2010.6)
 図書情報室新刊案内
 『ピンクがすきってきめないで』 (ナタリー・オンス文, イリヤ・グリーン絵) / 『働く女のスポーツ処方箋』 (吉田溪著)
 大阪人権博物館紀要 12号 (大阪人権博物館刊, 2010.1)
 太鼓の胴から見える近世のかわた村 渡辺村を中心として 村上紀夫
 少女たちの戦時体制 愛国婦人会と愛国子女団を中心に 裕夕記
 資料紹介 大阪市社会部住宅課『本市に於ける簡易宿の実状』 吉村智博
 障害者問題をどのように伝えるか 「学校de博物館事業」の取り組みから 松永真純
 岡山部落解放研究所報 289号 (岡山部落解放研究所刊, 2010.5) : 100円
 記念講演要旨 信州の部落・差別の歴史に学ぶ 斎藤洋一
 東京都浅草・弾左衛門の歴史研修に参加して 荒木弘
 解放教育 510 (解放教育研究所編, 2010.5) : 770円
 特集 若い教師にススめる「授業の方法」
 解放教育・バックナンバー (497号～508号) 目次
 解放教育 511 (解放教育研究所編, 2010.6) : 770円
 特集 可能性をいかすために 第59次日教組教研集会・山形から
 解放教育 512 (解放教育研究所編, 2010.7) : 770円
 特集 もっと生活つづり方を
 解放研究 23号 (東日本部落解放研究所刊, 2009.9) : 2,100円
 「武州鼻緒騒動」関係史料集成 前編 間々田和夫/大熊哲雄/畑中敏之
 多摩地域の被差別部落関係史料と若干の考察 小島正次
 青梅地域の長吏・非人とその旦那場 大熊哲雄
 解放研究しが 20号 (反差別国際連帯解放研究所しが刊, 2010.3) : 700円
 抑圧委譲考 上杉孝實
 健次と正秋 山村勉
 「研究所しが」20年を振り返る 岸衛
 解放新聞 2463号 (解放新聞社刊, 2010.3.29) : 80円
 山口公博が読む今月の本
 『高野聖・眉かくしの霊』 (泉鏡花作) / 『モーパッサン短篇選』 (高山鉄男編訳) / 『うちのご飯の60年 祖母・母・娘の食卓』 (阿古真理著)
 解放新聞 2464号 (解放新聞社刊, 2010.4.5) : 120円
 解放の文学 48 藤代泉『ボーダー&レス』 音谷健郎

事務局よりお知らせ

崇仁コミュニティセンターでの部落史出張講座全4回が無事終了しました。参加人数は昨年に比べて少なくなりましたが、皆さん熱心に聴いてくださり、質疑応答も活発におこなわれて充実した講演会になりました。簡単な報告を今号に掲載しましたが、詳しくは来年3月に発行予定の講演録をご覧ください。今年も11月から12月にかけて、部落史講座を解放センターで開催する予定です。詳しくは次号でお知らせします。また、ホームページ・メールマガジンでも決まり次第お知らせいたします。

所在地 〒603-8151 京都市北区小山下総町5-1 京都府部落解放センター 3階

TEL/FAX 075-415-1032

URL <http://www.asahi-net.or.jp/~qm8m-ndmt/>

開室日時 月曜日～金曜日 第2・4土曜日 11時～17時 (祝日・木曜(月2回)・年末年始は休みます)

交通機関 市営地下鉄烏丸線「鞍馬口」駅(京都駅より約10分)下車 北へ徒歩2分